第18回

大分県排泄リハビリテーション・ケア研究会

（ゆーりん研）

2022 年（令和 4 年）10 月 30 日

場所／大分県消費生活・男女共同参画プラザ「アイネス」
2階　大会議室

主催／大分県排泄リハビリテーション・ケア研究会

共催／キッセイ薬品工業株式会社

後援／株式会社大塚製薬工場

第18回

大分県排泄リハビリテーション・ケア研究会

（ゆーりん研）

2022 年（令和 4 年）10 月 30 日

場所／大分県消費生活・男女共同参画プラザ「アイネス」
　　2階　大会議室

主催／大分県排泄リハビリテーション・ケア研究会

共催／キッセイ薬品工業株式会社

後援／株式会社大塚製薬工場

目　次

ご挨拶 …… 1

会場案内 …… 4

プログラム …… 5

ワークセッション …… 7

事例報告・研究発表 …… 13

特別講演 …… 17

「第18回大分県排泄リハビリテーション・ケア研究会開催に当たって」

大分大学医学部腎泌尿器外科学講座
教授 秦　　聡 孝
（大分県排泄リハビリテーション･ケア研究会
代表世話人）

本年より、本研究会の代表世話人を拝命いたしました大分大学医学部腎泌尿器外科学講座の秦（しん） 聡（とし）孝（たか）です。

このたびの第18回研究会は、後藤英子先生、篠原美穂先生を当番世話人として、ハイブリット形式で開催されます。いまだCOVID-19の影響が完全には払しょくできない中、昨年に引き続いてのハイブリット形式での開催となりますが、開催準備にあたっては、当番世話人をはじめとする役員の先生方、そして事務局の平田裕二先生、藤岡浩二先生、さらには後援企業の皆様方に多大なるご尽力・ご支援をいただきました。この場をお借りして、深謝申し上げます。

さて、今回は、まず排泄支援チームの実際と今後の展開に向けたワークセッションが企画されております。日頃から、皆様方がどのように取り組み、どのような課題を抱えておられるのか、現場の生の声を情報共有し、今後の改善へとつながる議論がなされるものと期待しております。

また、事例報告・研究発表に続いて、特別講演では、長崎大学病院 泌尿器科・腎移植外科 病院講師の松尾朋博先生に、フレイルと排尿障害についてのご講演を賜ります。超高齢社会を迎え、高齢者の排尿障害と密接に関連するフレイルの諸問題は、日常の診療・看護・介護など、さまざまな場面で大変重要です。われわれがフレイルにどう対処・介入していくべきなのか、その方向性もご教示いただけるものと存じます。

なお、本研究会は、2012年９月に設立され、本年でちょうど10周年を迎えました。来年以降、コロナ禍の状況が落ち着きましたら、記念企画なども実施する予定です。

最後に、本研究会の特徴のひとつは、医師・看護師・理学療法士・作業療法士・介護士・介護福祉士・医療事務など多職種が参画している点です。ぜひ、今回の研究会でも、多様な観点からの活発な討論がなされることを期待しております。

第18回大分県排泄リハビリテーション・ケア研究会 当番世話人

「第18回大分県排泄リハビリテーション・ケア研究会開催に当たって」

大分リハビリテーション専門学校
作業療法士科 学科長

後 藤 英 子

（大分県排泄リハビリテーション・ケア研究会 世話人）

杵築市立山香病院
リハビリテーション科長 作業療法士長

篠 原 美 穂

（大分県排泄リハビリテーション・ケア研究会 世話人）

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の先行きが見通せない日々の中、第18回大分県排泄リハビリテーション・ケア研究会を、ハイブリット形式で開催する運びとなりました。開催にあたり多くの皆様のご尽力を賜りましたこと、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

さて、排泄は、一度獲得すると常にうまくできるのが当たり前とご本人もご家族も考える生活行為ではないでしょうか。それ故、しかるべきときに、しかるべき環境で、すっきり排泄できなくなった場合には、ご本人もご家族もショックを受けるだけでなく、これまでの生活はもう継続できないという判断に直結しやすいと感じています。また、「加齢、糖尿病や認知症等の罹患が原因なので仕方がない」と考え、飲食を控える、家に閉じこもりがちになる、これまで行っていた生活行為を辞める、地域行事やサロン等に参加しなくなるという生活不活発病や更なる生活の質の低下に結びつくといった負の連鎖をきたす場合が少なくないと感じています。これは、健康寿命を短くするだけでなく家族の負担感を増大させてしまうことに繋がります。私達、作業療法士の立場からみると、負の連鎖の最終段階で再び『その人らしい意味ある生活行為ができる生活』を取り戻すことは非常に困難で、時間もかかります。この負の連鎖を起こさないためにも、専門家による排泄機能評価を早期に受けることが非常に重要です。

そこで、今回は当会の設立10年を迎えた節目でもあり、困難を乗り越えてニュー・ノーマル時代に向けた会となるよう「排泄支援のこれから～地域で健康に暮らすために～」をテーマとしました。そして、ワークセッションを設け排泄支援の今後の展望を皆様と描きたいと思います。また、事例報告・研究発表では、排泄障害に対する実践の発表をいただく予定です。コロナ禍による生活不活発が深刻化している状況下ですが、今できる具体的で有効な支援策を共に考える機会となればと考えております。特別講演は、長崎大学病院 松尾朋博先生に「患者さんの未来を切り拓く過活動膀胱治療を考える」の講演をお願いしました。高齢者の下部尿路機能障害とフレイルとの関連について学び、地域で健康に暮らすために必要な、早期介入に結び付けるための知識を得たいと存じます。

本日の研究会が実り多きものになりますことを祈念し、当番世話人の挨拶とさせていただきます。

会　場　案　内

■大分県消費生活・男女共同参画プラザ「アイネス」

〒870-0037　大分市東春日町１番１号Ns大分ビル２階
TEL：097-534-4034　FAX：097-534-0684

アイネス（大分県消費生活・男女共同参画プラザ）には専用駐車場はありません。車で来所される方は、アイネスが入居しているNs大分ビル1Fの有料駐車場又は周辺の有料駐車場（大分県立美術館の駐車場等）をご利用ください。

【Ns大分ビル有料駐車場】　台数：10台
・Ns大分ビル全体の駐車場です。
・事前の予約等はできません。満車等で利用できないこともあります。

プログラム

■日時：2022年10月30日（日）13：00～17：00（受付12：30～）
■場所：大分県消費生活・男女共同参画プラザ「アイネス」２階　大会議室
〒870-0037　大分市東春日町１番１号Ns大分ビル２階
TEL097-534-4034　FAX097-534-0684
■参加費：1,000円（税込み）

製品紹介 …… **13：00～13：10**

株式会社大塚製薬工場

開会の辞 …… **13：10～13：20**

代表世話人　秦 聡孝（大分大学医学部腎泌尿器外科学講座 教授）
当番世話人　後藤 英子（大分リハビリテーション専門学校 作業療法士科 学科長）
篠原 美穂（杵築市立山香病院 リハビリテーション科長 作業療法士長）

ワークセッション …… **13：20～14：20**

座長：後藤 英子（大分リハビリテーション専門学校 作業療法士科 学科長）
篠原 美穂（杵築市立山香病院 リハビリテーション科長 作業療法士長）

テーマ：「排泄への取り組みと今後の展望～新たなステージに向けて～」

１.「排泄支援チームの実際と今後の展開に向けて
問題点やケアを共有するため、記録用紙の検討」
亀井 奈央子（大分赤十字病院 排泄ケアチーム 看護師）

２.「訪問リハビリテーションにおける下部尿路機能障害への支援について」
三宮 真琴（杵築市立山香病院 リハビリテーション科 作業療法士）

３.「当苑における排泄支援の取り組みと今後の展望」
児玉 貴雅（社会医療法人敬和会 介護老人保健施設 大分豊寿苑 リハビリテーション課 作業療法士）

４.「地域におけるコンチネンスサロンの開設」
佐藤 和子（大分大学医学部看護学科 客員研究員）

＝　休憩（15分）　＝

事例報告・研究発表 …… **14：35～15：25**

座長：宇都宮 里美（医療法人恵愛会 中村病院 看護部長）

１.「尿閉で間欠自己導尿中COVID-19となり、
２か所の感染療養施設を移動するようになった患者のケア検討」

増井 里香（大分赤十字病院 排泄ケアチーム 看護師）

２.「当院の皮膚・排泄チームの取り組み報告」

安部 美咲（医療法人社団 仁泉会 畑病院 作業療法士）

３.「ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術（RARP）における
術前MRI膜様部尿道長と術後尿禁制の検討」

澁谷 忠正（大分大学医学部腎泌尿器外科学講座 助教）

特別講演 …… **15：25～16：25**

座長：住野 泰弘（独立行政法人国立病院機構大分医療センター 泌尿器科部長）

テーマ：「患者さんの未来を切り拓く過活動膀胱治療を考える」

講　師：松尾 朋博先生（長崎大学病院 泌尿器科・腎移植外科 病院講師）

閉会の挨拶 …… **16：25～16：30**

第19回当番世話人　和田 浩治（和田病院 泌尿器科部長）

ワークセッション

13：20～14：20

座長：後藤 英子（大分リハビリテーション専門学校 作業療法士科 学科長）
篠原 美穂（杵築市立山香病院 リハビリテーション科長 作業療法士長）

「排泄への取り組みと今後の展望
～新たなステージに向けて～」

1.「排泄支援チームの実際と今後の展開に向けて
問題点やケアを共有するため、記録用紙の検討」
亀井 奈央子（大分赤十字病院 排泄ケアチーム 看護師）

2.「訪問リハビリテーションにおける下部尿路機能障害への支援について」
三宮 真琴（杵築市立山香病院 リハビリテーション科 作業療法士）

3.「当苑における排泄支援の取り組みと今後の展望」
児玉 貴雅
（社会医療法人敬和会 介護老人保健施設 大分豊寿苑 リハビリテーション課 作業療法士）

4.「地域におけるコンチネンスサロンの開設」
佐藤 和子（大分大学医学部看護学科 客員研究員）

排泄支援チームの実際と今後の展開に向けて
問題点やケアを共有するため、記録用紙の検討

○亀井 奈央子（看護師）[2)]、藤波 弘行[1)]、阿部 美紀[2)]、
増井 里香[2)]、足達 節子[2)]、河野 数俊[3)]、田崎 綾香[3)]

１）大分赤十字病院 排泄ケアチーム 腎・泌尿器外科
２）大分赤十字病院 排泄ケアチーム 看護部
３）大分赤十字病院 排泄ケアチーム リハビリ科

【背景】

当院は2016年12月に排泄ケアチームを立ち上げ、排尿自立指導料の算定を開始した。対象患者は尿道カテーテル抜去後の排尿障害の患者に問題解決に向けて活動している。最近では尿道カテーテル挿入後のケースでなくても対応しているが算定の対象にはなっていない。年間200件前後があり排尿障害患者に対して成果を上げており、少しずつ軌道にのっていることを実感している。その中、スタッフとの距離感を感じる事が在り、その原因は記録ではないかと感じている。今回以前から問題と感じていた記録について、検討したので報告する。

【目的】

問題点やケアの共有ができる記録用紙の検討

【委員会の活動の実際と問題解決への経過】

排泄ケアメンバーは医師を含め７名で構成され、尿道カテーテル抜去後の排尿障害の患者に対して、週１回のカンファレンスを行い、問題解決を図っている。カンファレンス時の報告は当日の担当看護師が参加して、排尿日誌の記録を見ながら報告し、カンファレンス後の申し送りも担当看護師に口頭で申し送る。現在の委員会の記録物は、①医師が記録後電カルに記録②「排尿自立支援に関する診療の計画書」の作成③議事録の記載の３つがある。スタッフに対して、伝わる記録を行い、問題点やケアの共有を行うことが重要とされることから、「排尿自立支援に関する診療計画書」 の記録の充実を図る必要があった。カンファレンス１回目、２回目、３回目と回数ごとに診療計画書の用紙を変えるようにし、ケアの内容・根拠、実施、評価を記載するようにした。その記録は電カルにアップしていつでも確認できるようにした。

【まとめ】

間欠導尿をするまでに改善しているのに、転院するために再度尿道カテーテルを挿入しなければならないケースが多々ある。連携の難しさを痛感している。まず、記録でスタッフと問題・ケアを共有できるようにして同じ目標で問題に取り組むようにしたいと考える。

訪問リハビリテーションにおける下部尿路機能障害への支援について

○三宮 真琴（作業療法士）[1)]、篠原 美穂[1)]、手嶋 誠一[1)]、
西田 育[1)]、衛藤 航平[1)]、草野 恵介[1)]、藤井 猛[2)]

１）杵築市立山香病院 リハビリテーション科
２）杵築市立山香病院 泌尿器科

【はじめに】

2015年に当訪問リハビリテーション事業所（以下、訪問リハ）で調査を行ったところ、尿もれや頻尿を認めた利用者のうち医療機関を受診していた者は12％にとどまり、27％は外出を控えていたことが明らかとなった。そこで当訪問リハでは利用者の排泄障害にアウトリーチし、医療と介護の連携、ケアマネジャーへの情報提供を心がけてきた。今回、事例を通して当訪問リハの役割について述べる。

【事例紹介】

70歳代、女性。Ｘ年Ｙ月に右片麻痺症状が出現しＡ病院に救急搬送、高血圧性脳出血（左被殻出血）と診断され入院した。発症から４ヶ月で右片麻痺は残存しているものの短下肢装具を着用し杖歩行が可能となった。要介護１の認定を受けて自宅へ退院し、週２回訪問リハの利用を開始した。退院から３ヶ月経過した際に、頻尿と尿漏れが気になるとの訴えが聞かれた。排尿状況や水分摂取状況などの聞き取りにより、頻尿、混合性尿失禁、機能性尿失禁が伺えた。本人に泌尿器科の受診を勧め、ケアマネジャーに排尿状況の情報を伝達した。泌尿器科の受診にて、過活動性膀胱治療薬の服薬を開始し夜間頻尿は不眠や夜間多尿の影響を指摘された。訪問リハでは失禁対策として骨盤底筋運動と下肢筋力訓練を実施した。１ヶ月後の再受診時に頻尿や尿漏れの改善を認めてきたことから服薬と泌尿器科の受診を終了した。訪問リハでは骨盤底筋運動の動画を紹介しその後２ヶ月経過時には尿漏れが改善した。頻尿に対して膀胱訓練を追加指導し排尿回数も減ってきた。運動の定着、畑仕事や運転、社会参加の再開をもって訪問リハを終了した。

【考察】

本事例は専門医に繋ぐことで下部尿路機能障害の背景を明確にし、課題に焦点を当てることができた。訪問リハの役割は、排泄動作、排泄に関連する心身機能の向上、環境調整を行うことだけでなく、排泄障害を見過ごさずアセスメントを行い受診勧奨と医師への情報提供を行う、ケアマネジャーへの提案を行うことが重要と考える。当事業所は泌尿器科をはじめとした医療機関との連携がとりやすい環境にある。排泄障害のアセスメントの技術向上とともに、かかりつけ医や訪問看護など他のサービスとの多職種連携を通して訪問リハサービスの充実を図っていきたい。

当苑における排泄支援の取り組みと今後の展望

○児玉 貴雅（作業療法士）、谷口 理恵

社会医療法人敬和会 介護老人保健施設 大分豊寿苑 リハビリテーション課

当苑は、2014年より排尿リハビリテーション・ケアチーム（以下、排尿リハケアチーム）を立ち上げ、現在に至るまで排泄に課題のある方々への支援に取り組んできた。しかし、入所者を対象とした活動に留まっており、通所リハビリテーション（以下、通所リハ）・訪問リハビリテーション（以下、訪問リハ）等地域で生活する方の排泄トラブルへの介入の必要性を感じつつも活動は行えていなかった。そこで、2020年度からは大分市の介護予防・日常生活支援総合事業の一つであるパワーアップ教室において、要支援者及び大分市介護予防・日常生活支援総合事業対象者（以下、事業対象者）に対して、過活動膀胱症状質問票（以下、OABSS）を用いた調査を開始した。2021年度からは通所リハと訪問リハにおいて、主要下部尿路症状質問票（以下、CLSS）の導入を開始した。以下、活動内容と今後の課題を報告する。

【介護予防事業】

パワーアップ教室ではこれまで105名の方にOABSSを実施し、約９割の方が夜間頻尿、尿意切迫感、切迫性尿失禁のいずれかの下部尿路症状を有しており、OABSS 診断基準より約半数の方が明らかに下部尿路機能の異常が認められたことがわかった。いくつかの文献では、身体機能の低下と過活動膀胱の有病率との関係が報告されており、介護予防事業としては要支援者及び事業対象者に対して、要介護状態を回避し自立した生活が送れるよう今後も評価を継続していく必要がある。

【在宅部門】

通所リハ、訪問リハにおいてはこれまで15名に対して、CLSSの実施及び下部尿路機能評価、個別アプローチを行ってきた。対象者全員が夜間頻尿や残尿感等何らかの下部尿路症状を有しており、QOLの低下も認めていた。取り組みを通して、在宅要介護高齢者が抱える排泄トラブルは多岐に渡り、個別的な対応を行う必要があることがわかった。今回は、職員の気づきや本人の訴えから取り組みが開始されたが、潜在的に対象となる利用者は多いことが予測される。在宅部門として体系的に取り組めるよう、評価体制の確立が急務である。

地域におけるコンチネンスサロンの開設

○佐藤 和子（客員研究員）[1)]、クリスティ 美保子[2)]、河野 泰喜[3)]

１）大分大学医学部看護学科 客員研究員
２）The Japan Travel Company 株式会社 代表取締役
３）杵築市大田区 区長

【目的】

人生100年時代を迎え、最期まで自分で食べて、歩き、排泄することは誰しもが願うことである。しかし、排泄の問題は他の症状に比べ、表現したり相談することを躊躇しやすく、そのため活動を制限したり受診が遅れるなど、いわゆる“隠れ排泄障害者”は年齢にかかわらず多くみられる。地域においても生活の場で排泄問題を率直に話し合い、専門家を交えてその人に合った対処法を実践できる環境を整えていくことが望ましく、交流を通して排泄障害だけでなくお互いの理解を深め、支援しあい、日常生活や社会活動が活性化することで、より質の高い健康につながると思われる。

そこで、地域で生活する人々を対象にコンチネンスサロン（以下サロン）を開設したので紹介する。

【方法】

対象は大分県内のＡ地区（47世帯）に居住する男女。年齢は問わない。Ａ地区の公民館を利用し、原則隔週男女別に行う。サロンの内容は、①排泄及び健康に関する悩みなどの聞き取り、②個々の問題毎に排泄指導プログラムを作成、③排泄障害についての講義、説明･指導（医療機関と連携し、必要に応じて講義依頼、患者紹介）、④運動プログラム（骨盤底筋体操等）の実施、⑤運営に際して、参加者がリラックスして憩えるように、クラシック音楽のBGMやアロマの香りによる癒しの環境を整える。

評価は、①排泄および健康に関する悩み等の調査と変化、②対象者の症状・状態に応じて排泄に関する質問紙調査（過活動膀胱症状質問票；OABSS、国際前立腺症状スコア；IPSS、QOL質問票；ICIQ-SF）を実施、③排尿日誌、排便日誌による回数、不随症状の変化などで行う。

【結果】

現在まで３回のサロンを実施。第１回目は男女一緒で25名の参加。２回目は男女別に実施した（男性３名、女性12名）。第３回目は６名。参加者は熱心に身を乗り出すように聴講し率直に質問していた。排尿・排便日誌も几帳面に記入し、自分の排泄状態を確認。運動とともに自立的に対処する姿勢が見られた。

【考察】

サロンへの参加姿勢から、自身の排泄問題への関心の高さが伺えた。

COVID-19による自粛生活で人々の集いの場が失われて久しく、健康に関する不安も増していることから、サロンの開設は好意的に受け入れられ、プログラムに関する関心も高く、時宜を得ていたと言える。また心穏やかになるBGMやアロマの香りに包まれた環境も功を奏していると考える。今後は参加者個々の排泄ニーズに即したオンディマンドなプログラムの提供、継続的な運動の維持や医療機関との連携も強化し、市民と専門家の協働によるサロンの発展を目指したい。

memo

事例報告・研究発表

14：35～15：25

座長：宇都宮　里美（医療法人恵愛会 中村病院 看護部長）

1.「尿閉で間欠自己導尿中COVID-19となり、
　2か所の感染療養施設を移動するようになった患者のケア検討」
　　増井　里香（大分赤十字病院 排泄ケアチーム 看護師）

2.「当院の皮膚・排泄チームの取り組み報告」
　　安部　美咲（医療法人社団 仁泉会 畑病院 作業療法士）

3.「ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術（RARP）における
　術前MRI膜様部尿道長と術後尿禁制の検討」
　　澁谷　忠正（大分大学医学部腎泌尿器外科学講座 助教）

尿閉で間欠自己導尿中COVID-19となり、2か所の感染療養施設を移動するようになった患者のケア検討

○増井 里香（看護師）[2)]、藤波 弘行[1)]、亀井 奈央子[2)]、
阿部 美紀[2)]、足達 節子[2)]、河野 数俊[3)]、田崎 綾香[3)]

１）大分赤十字病院 排泄ケアチーム 腎・泌尿器外科
２）大分赤十字病院 排泄ケアチーム 看護部
３）大分赤十字病院 排泄ケアチーム リハビリ科

【背景】

肺がんの治療中、尿閉から急性腎後性腎不全症を発症、間欠自己導尿（以後CICと称す）が開始された。そのさなか、COVID-19となり、当院コロナ専用病棟に移動。しかし、感染者数の増加により、受け入れ病棟での対応が難しくなった事と、すぐには自宅に戻れない状況から宿泊療養施設へ移動対処患者になった。CICを施行しながら８月31日から９月５日までの５日間宿泊療養施設に移動が可能かICTチームから排泄ケアチームに相談があった。このケースに排泄ケアチームが関わったので報告する。

【目的】

宿泊療養施設入所中にCICが継続され、急性腎後性腎不全の悪化防ぐための効果的な対策を検討することを目的とした。

【患者紹介・経過】

74歳　男性　妻と長男の三人暮らし。2018年に脳梗塞発症、後遺症に左不全麻痺があり杖歩行。上肢の麻痺は巧緻性に問題があり、妻の援助を必要としていた。2018年右上葉がんにて手術施行。2019年再発、肺門･縦隔リンパ節･左肺･左副腎転移、脳転移あり化学療法、サイバーナイフを施行。2022年８月10日突然尿閉をきたし、尿閉による急性腎後性腎不全発症。８月15日入院、尿道カテーテル留置し、８月19日排尿自立カンファレンスにコンサルテーションとなった。内服はシロドシン、アボルブ、ウブレチド。８月22日尿道カテーテル抜去し、間欠的自己導尿４回/日開始となった。

【方法】

宿泊療養施設入所について、泌尿器科医師は内服、CICが継続できれば移動は可能であると判断された。現状の情報収集を行ったその結果、左手麻痺の為一人では尿測ができない事が分かり、尿測は中止になった。その代わり身体症状で腹満感や発熱に注意してもらう事にした。症状出現時は、宿泊療養施設看護師と当院のWOCNに連絡するようにした。CICの手技は問題なかったが、パンフレットを用いて再確認した。宿泊療養施設の看護師にはサマリーに何かあれば当院WOCNへ連絡するように付け加え申し送った。

【結果】

退院後９/25の検査データではCRP0.23　BUN14　CRE1.14、１日尿量1,000～1,200/日　１回導尿量300～400/回、宿泊療養施設前と変わらない値であった。CICが安全に継続され、感染も起こすことなく、急性腎後性腎不全悪化は防ぐことができた。

【結論】

今回のケースで、①症状異常時の連絡先を含むサマリーで施設との連携②CIC用の必要物品の確保、患者が手技をマスターしていれば、場所は変わってもケアの継続は可能であり、治療効果は維持できることがわかった。

当院の皮膚・排泄チームの取り組み報告

○安部 美咲（作業療法士）、沓掛 裕子、牧 京香、後藤 智恵美、
三上 奈菜、平本 典子

医療法人社団 仁泉会 畑病院

【はじめに】

当院は、別府市にある病床数58床（一般病床13床、地域包括ケア病床45床）の地域に密着した病院であり、令和２年度より看護師を中心に排泄チームを立ち上げ活動を開始した。現在は、看護職・理学療法士・作業療法士で皮膚・排泄チーム（以下、チーム）と再構成して、泌尿器科専門医が居ない中で試行錯誤を重ねて活動を行なっている。今回は当院での取り組みの紹介と今後の展望について報告する。

【活動報告】

入院患者の平均年齢は85歳を超えており、日常生活動作に介助を要し、おむつを着用している方が入院患者の平均４割と多い。加えて低栄養の方も多く入院しており、褥瘡の発生率が高いことが課題となっていた。そのため、今年度より褥瘡の発生と関連の高い失禁関連皮膚炎（IAD）を予防する取り組みをチームが中心となり開始した。主な取り組み内容としては、①IADリスクに関するフローチャートを用いた対象者の選定、②要リスク者の皮膚観察、③皮膚の洗浄、保湿、保護方法の周知・徹底、④適切な排泄具の選定である。

【結果】

入院患者の約３～４割がIAD発生のリスクがあった。要リスク者に対しては、速やかに皮膚保護剤の処方依頼や排泄具の検討、排泄状態の把握やコントロールが行えるようになってきた。発赤や褥瘡の新規発生は徐々に減ってきておりチーム活動の成果を実感している。

【考察】

フローチャートを使用して要リスク者をピックアップし周知することで、スタッフ全員が同じ視点でケアできるようになってきたと考える。今後の課題としては、超音波機器や排泄日誌などを使用した評価を行い、より個別性のある排泄ケアを行うことが重要と考える。

ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術（RARP）における術前MRI膜様部尿道長と術後尿禁制の検討

○澁谷 忠正（助教）[1)]、石川 天洋[1)]、安部 怜樹[1)]、岩崎 和範[1)]、
佐藤 吉泰[1)]、篠原 麻由香[1)]、瀬治山 伸也[1)]、羽田 真郎[1)]、
井上 享[1)]、安藤 忠助[1)]、秦 聡孝[1)]、三股 浩光[2)]

１）大分大学医学部腎泌尿器外科学講座
２）大分大学医学部附属病院

【目的】

ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術（robot assisted radical prostatectomy; RARP）後の尿禁制回復に関わる因子の一つとして、術前MRIでの膜様部尿道長（membranous urethral length; MUL）が挙げられている。今回当院で施行したRARPにおいて、術前MULと尿禁制回復の関連について検討を行った。

【対象と方法】

2012年12月から2018年６月までに当院でRARPを施行した304例中、術前にMRIを撮影した252例を対象とした。MULの測定はMRIT２WIの矢状断を用いて行った。尿失禁パッドや成人用オムツを全く使用しなかった、または１日１枚使用したと回答したものを尿禁制ありと定義し、術後１、３、６、12か月目に評価した。術後に尿禁制が回復した群と未回復群で、MULについて比較検討を行った。

【結果】

全体の尿禁制回復率は術後１、３、６、12か月でそれぞれ38％、63％、78％、85％であった。

全体のMULの平均は10.25（±2.92）mmであった。術後１、３、６、12か月時点での回復群vs未回復群での平均MULはそれぞれ、10.67mm vs 9.96mm（P＝0.061）、10.38mm vs 9.97mm（P＝0.322）、10.42mm vs 9.57mm（P＝0.068）、10.38mm vs 9.30mm（P＝0.053）で有意差はなかったが、尿禁制回復群で術前MULが長い傾向にあった。

【結語】

本検討では有意差はでなかったものの、尿禁制回復群で術前MULが長い傾向にあった。さらなる症例の蓄積を図り、術後尿禁制回復を予測する有効なMULのcut off値についても検討していきたい。

特 別 講 演

15:25～16:25

座長：住野 泰弘（独立行政法人国立病院機構大分医療センター 泌尿器科部長）

「患者さんの未来を切り拓く
過活動膀胱治療を考える」

松尾 朋博 先生

（長崎大学病院 泌尿器科・腎移植外科 病院講師）

患者さんの未来を切り拓く
過活動膀胱治療を考える

松尾 朋博先生

長崎大学病院 泌尿器科・腎移植外科 病院講師

【プロフィール】

略歴：

2001年 3 月　山形大学 医学部医学科 卒業（山形県）
2001年 5 月～2002年 5 月　長崎大学医学部付属病院 泌尿器科 研修医（長崎県）
2002年 6 月～2003年 5 月　佐世保市立総合病院 泌尿器科 研修医（長崎県）
2003年 6 月～2004年 5 月　佐世保共済病院 泌尿器科 医員（長崎県）
2004年 6 月～2004年12月　聖フランシスコ病院 泌尿器科 医員（長崎県）
2004年12月～2008年 3 月　長崎大学医学部付属病院 泌尿器科 医員（長崎県）
2008年 4 月～2009年 3 月　佐世保共済病院 泌尿器科 医員（長崎県）
2009年 4 月～2010年 3 月　長崎県上五島病院 医長（長崎県）
2010年 4 月～2012年 3 月　長崎大学病院 泌尿器科･腎移植外科 医員（長崎県）
2011年 9 月～　長崎大学大学院 医学博士号取得
2012年 4 月～　長崎大学病院 泌尿器科・腎移植外科 助教（長崎県）
2019年 1 月～　同院 病院講師（長崎県）

専門医・認定医：

日本泌尿器科学会専門医・指導医
日本がん治療認定機構：がん治療認定医
日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会：泌尿器腹腔鏡技術認定医
日本排尿機能学会専門医
da Vinci Si・Xi支援手術教育プログラム終了
泌尿器ロボット支援手術プロクター（前立腺・膀胱、仙骨腟固定術）
難病指定医

所属学会：

日本泌尿器科学会　日本排尿機能学会・代議員
日本泌尿器腫瘍学会　日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会
日本内視鏡外科学会　日本癌治療学会
日本老年泌尿器科学会　国際禁制学会（ICS）
日本東洋医学会　日本女性骨盤底医学会
日本尿路結石症学会　日本HTLV-１学会

賞罰：

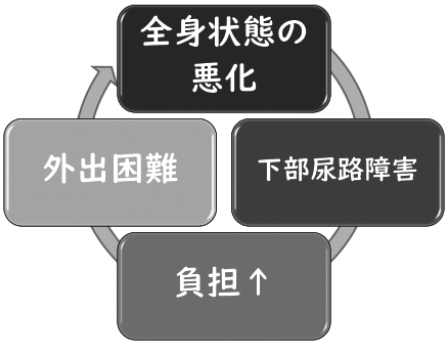
第22回日本排尿機能学会　学会賞（2015年）
第30回欧州泌尿器科学会　Best posters賞（2015年）
第31回欧州泌尿器科学会　Best posters賞（2016年）
第47回国際禁制学会（ICS 2017）　Award for Innovative Research Presented on Nocturnal Voiding Problems（2017年）
第32回日本老年泌尿器科学会　学会賞（2019年）

特許：

2016年11月　特許6032681　排尿障害の予防・治療剤　中村 龍文・松尾 朋博・酒井 英樹

みなさんもご存じのように過活動膀胱をはじめとした下部尿路症状（LUTS）はご高齢の方に特に多く発症します。LUTSは排尿に関する不快感を抱かせるだけに留まらず、患者さんの日常生活の行動範囲を狭めてしまいます。その結果、もともと筋肉量が減少し身体機能が低下した、いわゆるサルコペニア/フレイルの状態にあるご高齢の方では、LUTSを気にしすぎることで、満足な社会活動を行うことがかなわず、余計に全身機能が低下してしまうといった“負のスパイラル”に巻き込まれてしまう可能性すらあります（図）。

図. 高齢の下部尿路症状患者における負のスパイラル



もちろん泌尿器科医である私たちだけでは、できることは限られています。しかしながら、皆さんのお知恵を拝借することで私にもできることがきっとあるはずです。私たちは、①行動療法/理学療法、②薬物療法、③手術療法を患者さんの症状に合わせ提示し、LUTSを改善することによって、患者さんがよりよく生活しやすい未来を提供したいと考えています。講演当日は長崎で行っている活動も含め供覧させていただき、大分の皆さんと楽しくディスカッションできれば幸いです。

memo

広　告

脳下垂体ホルモン剤

薬価基準収載

ミニリンメルト®OD錠 50μg 25μg

MinirinMelt® デスモプレシン酢酸塩水和物口腔内崩壊錠

劇薬・処方箋医薬品注)
注)注意—医師等の処方箋により使用すること

●本剤の効能又は効果、用法及び用量、警告・禁忌を含む使用上の注意等については、
製品添付文書をご参照ください。

製造販売元
FERRING PHARMACEUTICALS
フェリング・ファーマ株式会社
〒105-0001 東京都港区虎ノ門二丁目3番17号
〈文献請求先〉 くすり相談室
フリーダイヤル：0120-093-168 FAX：03-3596-1107

販売元
キッセイ薬品工業株式会社
松本市芳野19番48号
文献請求先および問い合わせ先
〈文献請求先〉 くすり相談センター
東京都文京区小石川3丁目1番3号 TEL 0120-007-622
〈販売情報提供活動問い合わせ先〉 0120-115-737

ミニリンメルト®はフェリング・ファーマB.V.の登録商標です
©2020 Ferring Pharmaceuticals Co., Ltd.

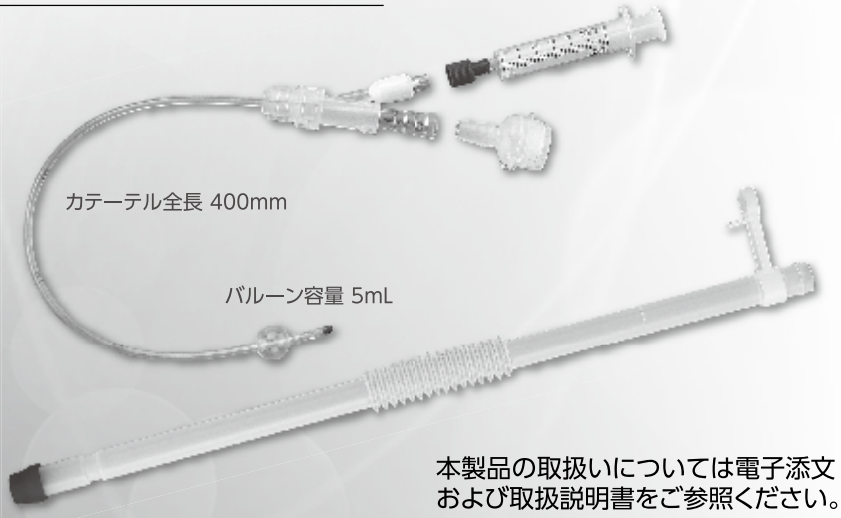
U/389TA/10/20/J
MM204MV
2020年10月作成

医療機器認証番号 304AABZX00042000

機械器具 51 医療用嘴管及び体液誘導管
管理医療機器 間欠泌尿器用カテーテル 36125000

OT バルーンカテーテル®

OT-Balloon Catheter®



サイズ	外径
12Fr	4.0mm
14Fr	4.7mm
16Fr	5.3mm
マーカー：先端から 100 ～ 200mm まで 50mm 間隔	

本製品の取扱いについては電子添文
および取扱説明書をご参照ください。

Otsuka
製造販売元
大塚テクノ株式会社
徳島県鳴門市瀬戸町明神字板屋島120-1

発売元
株式会社大塚製薬工場
徳島県鳴門市撫養町立岩字芥原115

販売提携
大塚製薬株式会社
東京都千代田区神田司町2-9

お問い合わせ先
株式会社大塚製薬工場 輸液DIセンター
〒101-0048 東京都千代田区神田司町2-2

<'22.07作成>

機械器具 51 医療用嘴管及び体液誘導管
管理医療機器 間欠泌尿器用カテーテル 36125000

医療機器認証番号：303AABZX00060000

アクトリーン

Actreen®

アクトリーン ハイライト カテ（ネラトン・チーマン）

カテーテル長：367mm

ネラトン型　外径（CH）：8,10,12,14,16

チーマン型　外径（CH）：10,12,14,16

アクトリーン ハイライト セット（ネラトン）

カテーテル長：367mm
採尿バッグ付き：1000mL

ネラトン型　外径（CH）：10,12,14,16

アクトリーン ミニ カテ

カテーテル長：90mm
外径（CH）：10,12,14

アクトリーン ミニ セット

カテーテル長：90mm
採尿バッグ付き：700mL
外径（CH）：10,12,14

◆本製品の取扱いについては電子添文および取扱説明書をご参照ください。

B|BRAUN SHARING EXPERTISE
製造販売元
ビー・ブラウンエースクラップ株式会社
東京都文京区本郷2丁目38-16

Otsuka
発売元
株式会社大塚製薬工場
徳島県鳴門市撫養町立岩字芥原115

販売提携
大塚製薬株式会社
東京都千代田区神田司町2-9

お問い合わせ先
株式会社大塚製薬工場 輸液DIセンター
〒101-0048 東京都千代田区神田司町2-2

<'22.04作成>

memo

世話人紹介

代表世話人	秦　　聡孝（国立大学法人 大分大学医学部腎泌尿器外科学講座 教授）
副代表世話人	佐藤　和子（国立大学法人 大分大学医学部看護学科 客員研究員） 平田　裕二（社会医療法人恵愛会 大分中村病院 泌尿器科部長） 小野　隆司（杵築市立山香病院 院長）
世話人	足達　節子（日本赤十字社 大分赤十字病院 看護部 皮膚・排泄ケア認定看護師） 伊東　朋子（学校法人後藤学園 厚生労働大臣指定 藤華医療技術専門学校） 宇都宮 里美（医療法人恵愛会 中村病院 看護部長） 大嶋 久美子（社会医療法人敬和会 大分リハビリテーション病院 看護部長） 大谷　将之（おおたにクリニック 院長） 大野　　仁（社会医療法人 三愛会 大分三愛メディカルセンター 泌尿器科部長） 小河　　泉（医療法人 石田記念会 日田リハビリテーション病院 看護部長） 片岡　晶志（国立大学法人 大分大学福祉健康科学部 学部長／教授） 河野　寛之（一般社団法人 大分県介護福祉士会 事務局長） 黒木　洋美（社会医療法人恵愛会 大分中村病院 リハビリテーション科 統括部長） 毛井　　敦（医療法人健悠会 老人保健施設ウェルハウスしらさぎ リハビリテーション部 課長） 児玉　貴雅（社会医療法人 敬和会 介護老人保健施設 大分豊寿苑 作業療法士） 後藤　英子（学校法人 平松学園 大分リハビリテーション専門学校 作業療法士科 学科長） 佐藤　浩二（医療法人社団 仁泉会 畑病院 リハビリテーション部 顧問） 篠原　美穂（杵築市立山香病院 リハビリテーション科長 作業療法士長） 中村　里香（社会福祉法人 大分県社会福祉協議会 大分県社会福祉介護研修センター 介護研修･総合相談部 主査） 西田　純一（社会医療法人恵愛会 大分中村病院 産婦人科部長） 三重野 英子（国立大学法人 大分大学医学部看護学科 教授） 溝口　晶子（学校法人 都築学園 第一薬科大学 看護学部 看護学科 基礎看護学領域 助教） 吉岩 あおい（国立大学法人 大分大学医学部 看護学科 教授） 和田　浩治（医療法人信和会 和田病院 泌尿器科部長）　50音順
監　事	井上　龍誠（JCHO湯布院病院 副院長） 住野　泰弘（独立行政法人 国立病院機構 大分医療センター 泌尿器科部長）
最高顧問	守山　正胤（竹田医師会病院 病院長）
顧　問	三股　浩光（国立大学法人 大分大学医学部附属病院 院長） 宮﨑　英士（国立大学法人 大分大学医学部総合診療・総合内科学講座 教授） 森　　照明（株式会社木許森メディカルホールディングス 取締役会長） 後藤　百万（JCHO中京病院 院長） 西村 かおる（NPO法人日本コンチネンス協会 名誉会長） 犀川　哲典（社会医療法人 三愛会 大分三愛メディカルセンター 理事長診療補佐／循環器内科 医長） 内田　勝彦（全国保健所長会 会長／大分県中部保健所 所長） 岩坪　暎二（社会医療法人北九州病院 北九州古賀病院 排泄管理指導室 室長）

第18回
大分県排泄リハビリテーション・ケア研究会
（ゆーりん研）

発　行　令和４年10月30日

発行者　秦 聡孝　佐藤 和子　平田 裕二　小野 隆司
研究会事務局
事務局長　藤岡 浩二
事 務 局　織田 真由美　阿部 美香　佐藤 小春　吉雄 麻衣子
〒870-0022　大分市大手町３丁目２番43号
社会医療法人恵愛会 大分中村病院
TEL097-536-5050

印　刷　有限会社中央印刷
〒870-0025　大分県大分市顕徳町２丁目２-38
TEL097-532-3805

ＵＲＬ　http://yulinken.jp